

なぜ 英語が話せないの

会話上達法—第三部—

〈29〉

このシリーズは、日本人が学校教育を通じて三十十年も英語を学びながら、外国人と簡単な会話もできない背景として「英語がしゃべれない英語教師」

の問題や、読み、書きに偏った入試の不備を取り上げてきた。ゆがんだ英語教育の影響で筆記試験と会話とは別もの——と考へる風潮が生徒たちの間に浸

透、役に立たない英語に憤慨して、社会人になつてから再び英語の勉強を始める人も少なくない。この第三部では、実用会話の習得法について、さまざまの体験談を紹介し、学習の助けをしたい。

◆ ◆ ◆

わが国の行政の、中枢機関が集中する東京、畿が闊。ここで働く官吏の九割近くは東大卒。日常会話にもたら横文字が飛び出す。會見で質問した記者に「そんなハイボセティカル(仮定的な)質問には答えられない」といった表現はザラ。「その形容詞、何という意味ですか」と聞くと「冷たく見返される」。

さすがはエリートと、言いたいが、実情はちよつと違う。難解な単語を数多く知つていゝことと、会話の美力とは必ずしも一致しないのだ。英単語を連発する査査の事務次官は、米大使館スタッフと意思疎通がうまく

できず、あわてて通訳の手を借る始末。英会話になると、途端に緊張して沈黙を守る。能吏もついでなき。

「同時通訳では日本」と拈

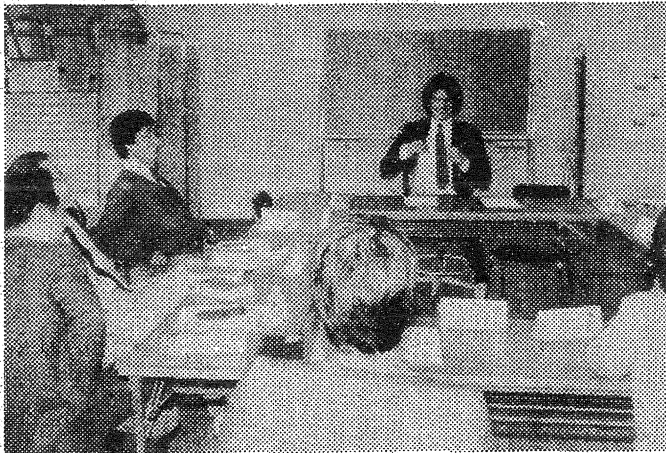
英語は、徹夜で一週間勉強しても大して効果がない。逆にわずか一時間でも毎日やれば実力がつく。途中、伸び悩みもスランプはあつても、決してあきらめないことである。トロイヤの遺跡を発見したシェリーマンは、短期間の船旅行中に五万回語をマスターしたといわれる語学の天才だが、語学では「欠かさぬ反復努力が才能をしのぐ」と。まずは銘記すべきだろう。

ゴルフに例えれば、ピッチングの寄せしかできないアマが、多彩なクラブで多様な技術を持つ青木功に勝てるはずがない。青木の絶妙なショットに舌を巻く人は、目に見えぬ努力を看過しがた。外人並みに英語を話すがいたら、死にもぐるゝの学習を積んだと考へて間違いない。

英語教育の第一人者で元NHK英会話テレビ講師の松本道弘氏は、努力の価値を、こう論調する。熊本県下で英語の先生を再教育する集中訓練計画(略称「中〇」)を実現させた福田昇八・熊本大学教授も「根気や継続性が英会話上達のカギ」と、同じ言葉を言つてゐる。

毎日の学習が必要 根気と継続性がカギ

英会話は毎日こつこつ勉強して積み上げることが大切



り紙つきの村松増美、サイマルインターナショナル社長は「英会話上達で最も大切なのは、毎日コツコツ努力を積み重ねること」と指摘する。英語がペラペラの元ワシントン特派員は「語